



カントウータ

Cantuta

No. 63

ボリビア独立200周年記念 第4号



松井章 写真展「アルパカ ～アンデスの民と生きる～」

◎会場：富士フォトギャラリー銀座

1. ボリビアの独立秘史～2つのエピソード～ 大島 正裕
2. ボリビアにおけるニジマス養殖技術協力の経緯とこれから 濱満 靖
3. ボリビア画家列伝【3】 Eji Štih 風樹 茂
4. 日本人移住地訪問記（6）サンファン移住地への再訪 松井 章
5. ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ 14— 渡邊 英樹

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ボリビアの独立秘史～2つのエピソード～

立教大学ラテンアメリカ研究所

大島 正裕

1. はじめに

昨年2025年は、ボリビア建国200周年だった。今回、日本ボリビア協会から「ボリビアの独立」をテーマにこのことだったが、このテーマについて私が最適とは到底思えない。しかし、昨年『ボリビアを知るための65章』を並み居る先生方とともに刊行した際、過分にも近代史の歴史のパートを受け持ち、その中で独立に関する章を扱った責任もあるので、独立革命関係の書籍を手にしてこのテーマについて改めて考えてみることにした。

実は、日本にはラテンアメリカの独立革命を専門にしている研究者というのはほとんどいない(のではないか?)。ラテンアメリカ諸国や米国では建国の歴史を辿ることは、国の将来とも関わるため重要な研究テーマだろうが、例えば日本でシモン・ボリーバルを専門的に論じて、その先住民思想や共和思想にはまだまだ課題があったなどの結論を下されるのがオチであって面白くないのかもしれないし、あるいはボリーバルがあまりに広域で活動したため、単純に一次史料にアクセスするのが困難だということもあり、日本でのボリーバル研究というのは盛んにならないのかもしれない。

こうしたわけで、日本語で読める独立革命の文献は限られているし、仮に各国の独立革命の詳細を調べようとすると、必然的に独立革命の研究をしている米国やラテンアメリカ諸国の研究者の文献を読まざるをえない。ただ、私自身の最近の関心が別のところにあることもあり、一次史料を始めとした各種文献を読み込んで本稿を執筆するというわけにもいかず、『ボリビアを知るための65章』の際、参考にした手元の文献に頼った。ただこれらの文献を読んでボリビアの独立について気になったことが2点ほどあった。

2. 国名はなぜ「ボリビア」なのか

1点目は、「ボリビア」という国名のことである。今さらの話だが、現在のボリビアの正式な国名は「ボリビア多民族国(Estado Plurinacional de Bolivia)」で、これは2009年にエボ・モラレス大統領が「ボリビア共和国」を変更し新しく名づけた新しい理念をもった国なので、厳密にいうと現在のボリビアは、このときをもって始まったというのが正しいかもしれない。しかし、それはあくまで国のあり方の変容であって、「ボリビア」自体は1825年から一貫して続いているというのがボリビア人の歴史認識なのである。ただ、実は独立直後の国名が「ボリビア共和国」でなかったことはあまり知られていない。ボリビアの国名がラテンアメリカの解放者シモン・ボリーバルを顕彰して名付けられていることは良く知られているが、であれば「ボリーバル共和国」が良いはずである。私もなぜ「ボリーバル」ではなく「ボリビア」なのか疑問に思ったこともあったが、あまり深く調べずに放置していた。

それを『ボリビアを知るための65章』を執筆していたときに思い出し調べてみたところ、案の定というべきか、やはりというべきか、1825年8月に独立したときは「ボリーバル共和国(República Bolívar)」という呼称だった。この点については、以前から指摘されていた。例えば、加茂雄三の『ラテンアメリカの独立』(講談社、1978)では、新しい国家が「ボリーバル」と名付けられ、のちに国名が「ボリビア」と代えられたことを指摘しているし、米国の独立革命研究の泰斗リンチ(John Lynch)の『スペイン領アメリカの革命(The Spanish American Revolutions 1808-1826 (Second Edition))』(W-W-Norton & Company, 1986)にも同様の記述がある。しかし、国名の変化についての経緯については記していない。

私が手元で重宝している『ボリビア史の基礎資料集(Antología de documentos fundamentales de la historia de Bolivia)』の独立宣言の項目を読むと、1825年8月6日の独立宣言の時点では新しい国名はまだ登場せず、その後、同年8月11日の法で新国名が披露されている。ここでは「第1条 新国家の名称は、現在も、また

将来もボリーバル共和国(República Bolívar)とする」とある。それでは将来もそうであるべきだった国名から代わった「ボリビア」という国名はいつから使われているのか。同書の編者歴史家のアルセ(José Roberto Arze)の短い解説によると、1825年10月3日の代表者総会の決議にて、初めて「ボリビア」の表記が現れるということであった。

しかしどういった経緯で「ボリーバル共和国」が「ボリビア共和国」になったのだろうか。ここではコンパクトにまとまっている2024年8月14日付の「エル・コレオ(El Correo)」紙のクリストバル・コルソ氏(Cristóbal Corso Cruz)の記事「ボリビアの名づけ親(El padrino de Bolivia)」を見てみよう。

植民地時代、アルト・ペルーと呼ばれた地域の独立宣言が署名された際、上述したように議会は1825年8月11日に、新国家の名称を「ボリーバル共和国」とする法律を承認した。これは解放者シモン・ボリーバルへの敬意を表したものであった。しかし、この国名はわずか2ヶ月しか続かなかった。この議会が閉会する前に、ポトシ選出の議員マヌエル・マルティン(Manuel Martín Cruz Cuiza)が、文法的に正しく響きの良い派生語として「ボリーバル共和国」を「ボリビア共和国」に改めるよう提案した。彼は「ロムルスからローマが生まれたのなら、ボリーバルからはボリビアが生まれなければならない」と主張した。国家創設時のやや芝居がかったエピソードかもしれないが、いま少し踏み込んで調べてみたいが、今はとりあえずこのエピソードを大筋で認めるとして、ここから幾つか面白いことが分かる。

確かに「ボリーバル共和国(República Bolívar)」はスペイン語の文法表記としては正しくない。Bolívarの形容詞的表記「Bolivariana」を使っているのは、現在のベネズエラである。同国の正式名称はラテンアメリカ主義(ボリーバル主義)を掲げるウーゴ・チャベスによって1999年に名付けられた「ベネズエラ・ボリーバル共和国(República Bolivariana de Venezuela)」である。当時のアルト・ペルーには、「ボリーバル共和国(República Boliva-

riana)」という表記を生み出す選択肢もあったのだと思う。ただ、マヌエル・マルティンは、ここにローマ誕生の神話を挿入した。ローマ建国の神話的存在であるロムルス(Romulus)からローマ(Roma)という呼称が生まれた。このひそみこならって、「ボリーバル(Bolívar)」は「ボリビア(Bolivia)」だというわけである。ここには、実に興味深い意思が隠れていて、これは単に解放者ボリーバルの顕彰のみならず、ローマのような共和国を創設するのだというマヌエル・マルティンの意気込みが感じられる。

3. ボリビアはボリーバルによってのみ建国されたのか

上述の国名でもわかる通り、ボリビアの国名の由来は「ボリーバル」を顕彰したものだ。それでは、ボリビアはボリーバル、憲法上の首都スクレの名前のもとになったスクレ(Antonio José de Sucre)のみの奮闘で建国されたのだろうか。答えはもちろん否。おそらくボリビアに行ったものなら誰でも聞いてことのある「ムリーリョ広場」というのがラパスにある。このムリーリョ、南米の独立の先駆者ペドロ・ドミンゴ・ムリーリョ(Pedro Domingo Murillo)のこと。独立の先駆者としてアルト・ペルーの独立を夢見て、1809年スペインに戦いを挑むが、時期尚早につき捉えられ処刑された。ただ、この事件については比較的良好に知られている。



写真1-1 Bs100紙幣に描かれたフアナ・アスルドゥイ(人物左)

ところで2016年、ラパスに勤務していた私は、ボリビアの有名な映画集団ウカマウの新作「Guerra de la Patria Grande, Juana Azurduy(大なる祖国のゲリラ フアナ・アスルドゥイ)」を見た。迂闊なことにそのとき始

めて私はフアナの名前を知った。この映画はアルト・ペルーの解放がなかった後のチュキサカ(現在のスクレ)に、ポリーバルとスクレが長年スペイン副王軍と戦ってきたかつての女性闘士フアナを訪ねるところから始まる。偉大な解放者を貧乏なフアナが心ばかりのもてなしをする。ポリーバルとスクレは、フアナのこれまでの戦いに敬意を捧げながら、フアナの話聞いていくというストーリーだ。

アルト・ペルーと呼ばれた南米の中央部は、ラプラタ(アルゼンチン)の革命軍と副王軍が激しく争った地域でもあった。ラテンアメリカの独立革命で、ペルー副王軍は最後まで強力で、副王軍を撃破できなかったことがペルーとボリビアの解放を遅らせたが、この大きな流れの中で、アルト・ペルーに真空が生じ、長年にわたって地方割拠型のゲリラ活動が続き、そのうちのいくつかは半独立勢力として、ポリーバルの勢力がアルト・ペルーを解放するまで粘り強い戦いを続けていた。これら小規模のゲリラ支配地域は、レプブリケタ(republicueta(小共和国の意))とも呼ばれている。

このゲリラ闘争の中で知名度があり、注目されていたのが、フアナ・アスルドウイ(Juana Azurduy)であった。独立革命に全力を注ぐフアナは、子供たちを流行り病で失い、夫も革命戦争で失った。しかし革命の先の未来を信じてフアナは戦い続けた。独立はなった。ところが依然としてラテンアメリカの統合を夢想するポリーバルとスクレを、新生ボリビア国の将来を心配するフアナは刺すような言葉で批判していく。メスティソとして先住民にシンパシーを抱くフアナ(というかわカマウ)は、独立以降先住民が下層に押し込められたひとつの遠因として、ボリビアの解放が外から、しかも偉大な「解放者」によって、この地域の現実を理解しないまま行われたことが問題といいたいのだ。

また、フアナは家族を犠牲にし、独立を勝ち取ったにも関わらず、何ら報われることがなかった。彼女はポリーバルやスクレからの栄誉を心に受け止めつつ、最後は貧困の中でこの世を去った(とのテロップが流れる)。勿論、映画でもあり、脚色も多くあるとはいえ、こうしたフアナのよ

うな無数の理想がひとつの巨大な物語に収斂してしまったこと、これがまさに独立以降のボリビアの近代史なのだという評価は、歴史学を研究している私の心にも刺さった。

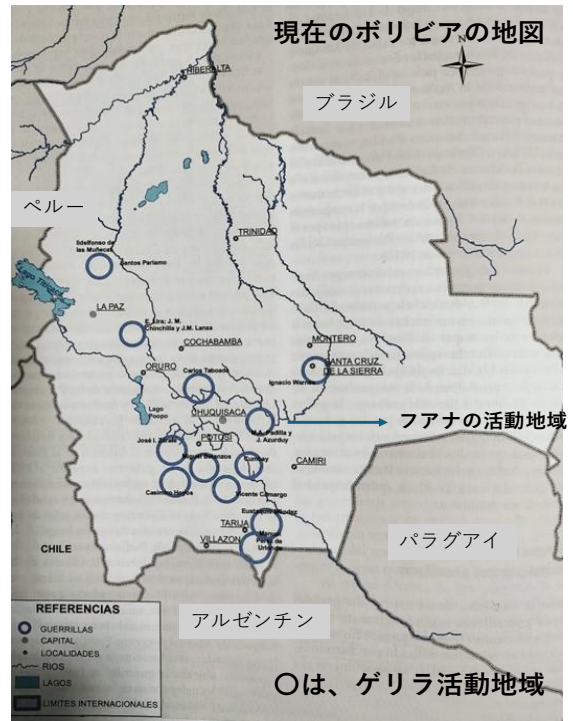


図1-2 フアナたちゲリラが専らした地域*

なお、この映画は、2025年に『女性ゲリラ、フアナの闘い—ボリビア独立秘史—』として日本でも公開された。また、フアナについては、伊藤滋子氏の『女たちのラテンアメリカ』(五月書房新社、2021)でも取り上げられているのでご関心ある方は是非お読みください。

これらの独立に連なる上の2つのエピソードは、「ポリーバル」の名前を背負いつつ、ポリーバルの理念とは異なる国を歩もうとした「ボリビア」の歴史を象徴しているかのようである。

以上

*出典: María Luisa Soux (Coordinadora), *Bolivia, su historia tomo III Reformas, rebeliones e Independencia 1700-1825*, La Razón, 2015, p.212.

2. ボリビアにおけるニジマス養殖： 技術協力の経緯とこれから

元JICA専門家

前職 (株)国際水産技術開発 主席研究員

濱満 靖

1986年9月、私は、国際協力機構(以下JICA)の青年海外協力隊員としてエルアルト空港に降り立った。酸素の少なさより記憶に残っているのは、目が覚めるような冷涼な空気で、「ついに着いた。よし、がんばるぞ」と思ったことを記憶している。26歳の時であった。協力隊参加後も後述する技術協力プロジェクトにJICA専門家として参加する機会を得て、結局合計12年間にわたり、ニジマス養殖に携わることになった。

数年前に、私の前職の同業他社の水産分野国際協力コンサルタントの方から、「日本人による水産協力」という書籍を編纂したいが、中南米の養殖協力の章をお願いできないかと依頼された。本稿は同書籍の内容を一部加筆したものである。

1. ニジマス養殖協力の背景

ボリビアの河川は大きく三つの水系に分けられる。アマゾン水系、ラプラタ水系、そして海洋には流出しないチチカカ湖を中心とした閉鎖水系であるアルティプレーノ水系である。アンデス山脈はボリビア国土内で東西2本に分かれ、その間に4000m以上の高原台地(アルティプレーノ)を形成している。その台地では、両山脈の氷河からの融水が小湖沼や小河川を通り、チチカカ湖に流れ込む。同湖は、表面積約8,400km²で琵琶湖の約12倍、最大水深は約285m、水面の標高は3812mである。年間水温は12-18℃程度でありニジマスの飼育には申し分のない水温環境と言える。

チチカカ湖へのニジマスの移植は、1943年ペルー側の孵化場で生産された稚魚をチチカカ湖へ放流することから始まった。山間部の小湖沼への移植は、後にJICA協

力の最初の拠点となるユングス街道のラパス市から約40km地点にあるポンゴ孵化場で、1948年に始まった。(MacCremmon, 1971)²

チチカカ湖に移植されたニジマスは、広大な水域と豊富な餌料という好環境の中、最大で全長1.4m体重22kgまで成長し、生産量は年間5万トンに達したものの、1960年代には小型化が顕著になったとの報告がある(松井, 1962)。

ボリビア政府は、天然ニジマス資源が減少したことからニジマス養殖を振興するため日本政府に技術協力を要請し、個別専門家の派遣が始まったのが1977年であり、その後養殖普及のための協力隊員の派遣も1984年に開始された。

ニジマス養殖技術協力が活発に行われる中、種苗¹生産の増大と普及・研修活動の拠点整備のため、日本政府の無償資金協力により、チチカカ湖岸に「水産開発研究センター」が建設され、1988年3月に開所された。その後同センターを拠点に、1991年6月から5年間の期間にて、技術協力プロジェクトが開始された。



写真2-1 ボリビア水産研究開発センター全景。2002年ころ撮影。

2. 技術協力プロジェクトの内容

本プロジェクトでは、1)地域水産開発研究施設としての機能強化、2)有用魚種の増養殖技術の普及、という二つのプロジェクト目標が設定された。その上位目標は「北部アルティプレーノ地域における水産業の発展」とされていた。

の種・苗(たね・なえ)と考えていただければ。

¹養殖生産を行うために導入される受精卵や稚魚のこと。農業

プロジェクト目標を達成するためのアウトプットとして次の8項目が設定された。

- ① ニジマス種苗生産技術の安定化
- ② 配合飼料開発
- ③ 高地に散在する小湖沼へのニジマス放流試験
- ④ チチカカ湖在来種の生態調査
- ⑤ 水産加工品の開発
- ⑥ 漁獲量・流通統計調査
- ⑦ チチカカ湖環境調査
- ⑧ 農民への水産技術指導

である。

本プロジェクトには長期専門家が4名派遣された。その指導科目は、チーム・リーダー、業務調整、ニジマス養殖、水産資源管理であり、当時のJICA技術協力プロジェクトの典型的な専門家派遣体制であった。

以下各項目における主だった活動成果を説明する。①同センター建設の基本設計書にはニジマス生産数値目標として年間50万尾の稚魚生産と16tの食用魚生産が挙げられていた。プロジェクト期間中に、各項目の最大値で発眼卵130万粒、稚魚30万尾と食用魚25トンの年間販売量を達成した。



写真2-2 センター内の網生簀でのニジマス飼育

②ボリビアは他の南米諸国と並び大豆の生産国であり大豆粕が安価に入手できる。この大豆粕を利用した魚粉代替配合飼料の開発試験を実施し、増肉単価の低い飼料処方策を策定した。



写真2-3 ニジマス用飼料製造機。センター建設時からのもの。

③農民と協同で実施した小湖沼の環境調査及びニジマス放流後の追跡調査により、ニジマス放流技術は向上し、調査実施地域ではニジマス生産が行われるようになった。



写真2-4 山岳部小湖沼でのニジマス捕獲調査。網を入れている。

④ブンク(*Orestias O. luteus*)、カラチ(*O. agassii*)、マウリ(*Trichomicterus* sp.)といったチチカカ湖の在来魚種について種苗生産試験が実施された。

さらに、外来種ではあるがニジマス以外の魚種としてペヘレイの種苗生産試験も実施された。⑤ニジマスの燻製に始まり、フレーク、マスのイクラなどの試作と商品化を行った。湖岸漁民に対し在来種の燻製作成のための簡易燻製機の開発と実習なども実施した。



写真2-5 チチカカ湖の在来種。フリヤケというスープにして食される。

⑥流通統計調査担当者が短期専門家の指導の下、ラパス市内のニジマスを含む魚類消費動向に関して、無作為抽出した家庭へのアンケート調査を実施した。1995年当時でラパス市の年間ニジマス消費量は約500トンと推定された。⑦チチカカ湖のセンターが位置するティキーナ海峡以南の小湖に4定点を設定し、毎月の水質測定を1年半実施しデータ集として取りまとめた。

⑧チチカカ湖での網生簀養殖、河川水等による池養殖、小湖沼へのニジマス放流の3つの養殖形態における生産者を対象とした技術研修を、北部アルティプレーノの農村から希望者を募り無償にて実施した。プロジェクト開始時からその後の専門家派遣の1992-2002年の間に、センターでの研修生は1,700名を超えた。



写真2-6 ドラム缶で作成された普及用の簡易燻製機。研修でのコマ。



写真2-7 チチカカ湖での定点観測。深度別の水温を測定しているところ。

この「ボリビア水産開発研究センター計画」プロジェクトは、2年間の延長期間を含め1998年まで計7年間実施され、1999年から3年間はセンターの運営能力向上とニジマス養殖普及のため個別専門家が派遣された。さらに青年及びシニアの協力隊の派遣も実施され、2005年頃にはすべての協力が終了した。1977年の個別専門家派遣から30年近くJICAからの協力が行われたことになる。

JICAによるニジマス養殖に関する技術協力事業を整理したものは下記の表1のとおりである。

表2-1 JICAによるニジマス養殖に関する協力取り組み一覧

年代	協力形態
1977-1991	個別専門家派遣
1984-1991	青年海外協力隊派遣
1988	無償資金協力（センター竣工）
1991-1998	技術協力プロジェクト
1999-2002	個別専門家派遣
1999-2005	青年海外協力隊派遣（シニア含む）

上表にありますようこの長期間、多くの長期及び短期専門家及び協力隊の皆様、現地で支援いただいたJICAボリビア事務所長始め所員の方々、在ボリビア大使館の皆様、そしてJICA本部で我々の派遣前や派遣中にお世話になった職員の皆様に関わっていただきました。今回は、大変僣越ではありますが私が皆様を代表する形で本稿を執筆させていただきました。

3. ボリビアのニジマス養殖の現状

2019年暮れに私費で訪問した時には、センターの生簀の数は当時の倍近くになっており、配合飼料製造プラントが完成していた。センターでは、100万尾の稚魚生産と100トンの成魚生産、そしてその生産を支える160トンの飼料製造をそれぞれ年間目標と定め、センター自らのニジマス生産増と周辺養殖漁家への種苗と飼料提供を目指していた。



写真2-8 ボリビア側の予算で完成した飼料製造プラント。2019年撮影。

その後、2024年春のボリビア訪問時には、詳しい数値の聞き取りはできなかったものの前述の目標は達成されぬままの様子であった。しかし、目を引いたのはINIAF (Instituto Nacional de Innovación Agropecuaria y Forestal, 国家農牧林業研究所)による研究活動である。INIAFは元センター技師を登用し、ニジマスの優良種苗生産の研究や前述の在来種の種苗生産研究、さらにはペヘレイの種苗生産にも取り組んでいた。今後さらなるセンターの有効利用が進むことを期待している。

センターの外に目を向けると、各地でニジマス食が広まっていることが確認された。チチカカ湖沿岸ペルーとの国境近くの観光地であるコパカバーナ近郊の養殖場では、「トトラの浮島」を模した湖上レストランを、ニジマスを養成する網生簀の近くに設置し、訪問者に活きたニジマスを見せて調理するという、まさに六次産業の取組が行われており盛況を呈していた。火付け役は、同地区出身の古くからのセンター技師である。



写真2-9 在来種やペヘレイ稚魚の飼育室とINIAFの担当技師。2024年撮影。



写真2-10 コパカバーナ近郊Chari村での湖上レストランと養殖用網生簀。2024年撮影。

ラパス市からユンガス方面に向かい、4,700mの峠を越えて車で約20分の標高3600m程度まで下りたポンゴ集落の川沿いに、冒頭に紹介したポンゴ孵化場がある。現在でもティキーナ・センターの孵化場として機能しているが、その隣に養殖場に加えて釣り堀とレストラン展開している経営者もいる。類似するレストランはさらにその下流にも何軒か存在し、これらも六次産業と言っていいだろう。街道沿いに20軒ほどのキオスクがあるが、そこでもニジマスは提供されている。このポンゴ地区は、トレッキングやジップライン、石積みの教会などの地元資源を活用した観光開発に力を入れている地区でもある。ここでも当時のポンゴ孵化場担当技師が、キオスク経営の傍らニジマス種苗生産施設を立ち上げていた。



写真2-11 ポンゴ孵化場に隣接したニジマス養殖池とレストラン。

FAO(国連食糧農業機関)の統計によればニジマス養殖生産量は2020年に1,500トンを記録しているが、その後はプロジェクト実施当時の500トン程度で推移している。一方、魚類養殖用飼料の主原料となる魚粉の世界有数の生産国である隣国ペルーは、2016年に生産量は50,000トンを超えさらに生産量を伸ばしている(図1参照)。ペルー産ニジマスは日本にも輸出、刺身用のトラウトサーモンとして販売されている。

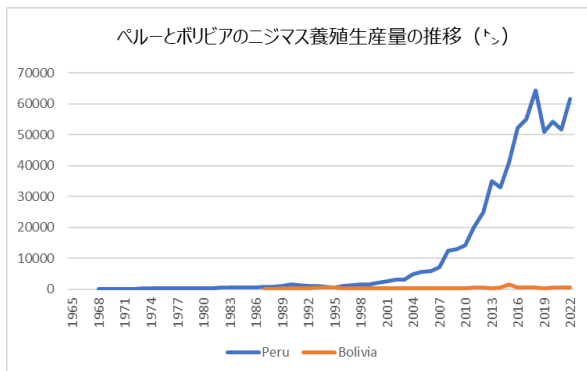


図2-1 ペルーとボリビアのニジマス養殖生産量の推移

現在のボリビアの養殖生産量は、ほぼ確実に各地で消費されるニジマス需要を満たしておらず、隣国ペルーからの輸入に頼っているものと思われる。コパカバーナで湖上レストランを経営するセンター技師に会った際にも、自身の生産分では間に合わず近隣養殖場を奔走していると話していた。

4. 自己評価と今後の展望

ボリビア冷水域の特にチチカカ湖の環境は、ニジマス

の養成には申し分ない。他県でも養殖適地はあるであろう。これまでのJICA協力によりニジマス養殖の知識・経験は、センター技術者や研修を通して幅広く伝播している。ボリビアでのニジマス養殖の更なる発展を阻害している要因は、優良種苗と良質な配合飼料の供給不足である。近年の政情不安定によるニジマス養殖の開発政策を担当する行政及び現場担当技術者の頻繁な交代や、国と県の連携の悪さが好転すれば、さらなる養殖生産増は望めると考えている。2025年暮れからの新政権体制下の民間投資促進政策の中で、ニジマスも他の産品と共に重要生産物として捉え支援していただければと期待している。

私は6月下旬にボリビアに再度訪問する予定である。そして近いうちには移住を計画している。私の夢は、ニジマス養殖協会を立ち上げて、ペルーからの輸入に依存しない、持続的でチチカカ湖をはじめとするアルティプレーノ水系の自然環境保全も考慮したニジマス養殖の発展に貢献することである。そのためのNGOを設立することもありかと考える。その際には、お互い高齢になったとはいえまだまだ動ける、当時一緒に活動したボリビア人技術者たちとこれら活動を行いたい。

今後とも日本ボリビア協会ははじめ国内外のボリビア関係者の皆様ご支援を頂きたく何卒宜しく願いいたします。

(終わり)

参考資料

- 綿貫尚彦編(2023). 日本人による水産協力—開発現場をアップデート— 第9章 養殖開発への協力:中南米の事例. pp.152-167. 北斗書房
- MacCrimmon, H. R. 1971. World distribution of rainbow trout (*Salmo gairdneri*). J. Fish. Res. Bd. Canada 28: 663-704
- 松井佳一(1962). 南米チチカカ湖のニジマスについて. 日本水産学会誌 28巻 第5号 497-498
- ボリビア水産開発研究センター計画終了時評価調査団報告書(1996).国際協力事業団
<https://libopac.jica.go.jp/images/report/P0000037037.html>

3. ボリビア画家列伝【3】

—Ejti Štih—

ジャーナリスト・作家

風樹 茂

1. Caballitoの思い出

熱帯雨林の中の小村で援助関連の仕事をしているとき、事務所はサンタクルスにあった。2、3日の短期の休日を取れたときはサンタクルスかブラジルのコロンバに列車で行き都会の空気を吸った。コロンバには大湿原のパンタナルの入り口という観光の目玉があったが、サンタクルスはこれといって思いつかない。

けれども鮮明に覚えているものがある。カーニバルだ。それもリオデジャネイロやオーロ口の華麗なパレードではない。「Caballito(仔馬ちゃん)」(Caballito掲載)なる可愛い名前のサロンである。カーニバルが近づくとテレビで宣伝が始まる。胸の高鳴るカーニバルの音楽が分かり、そして仮面(というより覆面)をした、妙齢の女性たちが現れる。まるでアラブのヒジャブである。覆面の中身は想像するしかない。こんなときは得てして都合のよい想像をするものだ。独り身の寂しい男性には効果的な宣伝だった。



写真3-1 サンタクルスのカーニバルの象徴だったのに

職場のボリビア人の同僚は口々にこういう。「当日は無礼講。仮面の女性と手を握ろうが、キスしようが、勝手放題だよ。逃す手はない」

最近、サンタクルスにかかわるネット情報を逍遙してみたのだが、私よりも古い時代に経験している方は、次のよう

に述べていた。「素晴らしい青春を過ごしたものだ。今はないCaballitoのことだ。女性たちはみな覆面でやってくる。我々男どもは椅子に座って待っていればよい。女性が手を差し伸べてくる。そしていっしょに踊る。そのあとで、どこやらで仮面をとるときの、緊張。天国と地獄……」

80年代後半、私にはただ座っていたという記憶はない。もの凄い人込みの中を右往左往し、仮面女性に手を差し伸べ、断られ、ひとり寂しく踊り、懲りずに手を差し伸べ、断られ、徒労を繰り返し疲れに疲れ、たまたま知り合いのラパスから来ている会計士に出会い、同様に独りで寂しく踊っているのを見て、はははと笑い—

なんのことはない、ほとんどの女性が男性同伴、つまり恋人ときているのだった。無論、単身で来ている女性もいたが、私はお眼鏡こかなわなかったわけだ。容姿も問題だが、多分、ピカピカの靴を履いていないことから、身分を推測されたのだろうと今は思っている。

そんなわけで“Lollando se fue(=泣きながら去った)”というランバダの哀しいメロディを口ずさみ、虚しく事務所兼宿泊施設に戻り、早朝の列車で現場の小村に戻った。その日は水かけ行事があった。列車にさえ水をかけてくる若者がいる。宣伝や友人の口車に踊らされ、怒りに近い感情を抱いていた私は連結部分に立ち、「ほら、かけてみる、XXX!」と薄汚いスペイン語でけしかけた。バケツから水、いや、赤い液体が、なんと動物の血をかけてきたのだった。



写真3-2 水ならまだ気持ちいいぞ

そんなサンタクルス（Santa Cruz de la Sierra）の風俗を描いているのがEjti Štihである。私設の屋根裏美術館に所蔵してある写真3-2と写真3-3の2点の作品を見るたびに、友人と楽しく酒を飲みかわした楽しい時とともに、Caballitoでの悔しい夜が蘇ってくる。



写真3-3 アミーゴは最高

Ejti Štihの本質

Ejtiはほのぼのとした絵画ばかりを描いているわけではない。むしろ、彼女の真骨頂は社会や世間に向けた光る密かな目—それは政治、軍事政権、秘密警察などを私は思うのだが—それらを控えめな形で絵画の構図の中に定着させたことである。

彼女はボリビアではなく、旧ユーゴスラビア（現スロベニアのクラン（Kranj））の出身、1957年生まれ。ユーゴスラビア社会主義連邦共和国は、今はもうない。1980年にスロベニアの首都リュブリャナでチトー大統領が死去した後、解体され、各民族国家へと分裂する。スロベニアは経済や社会がオーストリアに隣接していることから、最も西欧に近く、ボスニアヘルツェルビア紛争にも巻き込まれずに1991年に独立を果たす（10日間の戦争で済んでいる）。民族の90%がスロベニア人であることも幸いしたのかもしれない。セルビア人が10%以上住んでいる南の隣国クロアチアは4年の間戦火にまみれている。けれども祖国の崩壊と隣国の戦争は作家に少なからず影響を与えたに違いない。

私が彼女の瀟洒な家に招待されたのは1988年の春で

ある。サンタクルスの文化会館で展示されていた彼女の絵が気に入ったのだ。馴れ初めは聞き忘れたが、彼女はサンタクルス出身の建築家と結婚していた。1981年に移り住んだボリビアはLuis García Meza Tejadaの軍事独裁政治であり、しかも1985年には2万パーセントを超えるハイパーインフレに見舞われ、3度目の大統領をついたビクトル・パス・エステンソーロは、ボリビア革命（1952年）時に自ら作った労働組合を潰しにかかり、社会主義から新自由主義へと大きく舵を切っていた。

そんな騒然とした社会状況の只中で描いたのが投票である。顔のはっきりしない匿名化された人々の中に、赤いキャップをかぶった人間の視線だけが強く印象付けられる。

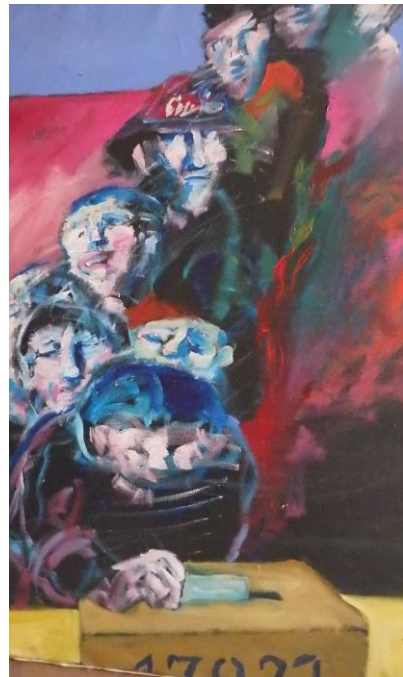


写真3-4 視線！背中が痛い

宗教に対しても彼女は冷徹な目を向ける。1988年5月9日～14日にかけてローマ教皇ヨハネ・パウロ2世（John Paul II / Juan Pablo II）がボリビアを訪れる。教皇来訪は史上初めてのことである。ラパス（La Paz）、コチャバンバ（Cochabamba）、スクレ（Sucre）を巡り、サンタクルス・デ・ラ・シエラ（Santa Cruz de la Sierra）にも5月13日に訪れている。



写真3-5 なぜ軍人が？

私は新聞やテレビで見ただけなのだが、教皇は熱狂的に迎えられた。ポーランド出身で民主的な社会を求めている教皇である。でも、彼女の絵の中では、教皇の背後にサングラスをかけた軍人が目を光らせている。

これらの絵とはモチーフを隔しているのが、3連作である。本品は80cm x 100cmの巨大なもので、確か「人生の窓」という題名だったと思う。上記の二作品と比べると、様々なものを詰め込み過ぎて、主題がわかりにくい。意欲がもうひとつ絵画に結実していないかもしれない。ただし、ボリビアを代表する作家の初期の作品のひとつとして価値がある。

ボリビアの美術批評家たちには、Ejti Štihはボリビア美術史の中で、“サンタクルス社会を最も強く描いた外国出身画家”、“ボリビア民主化期の『真の証人』”と評価され、今では“国内芸術界の大黒柱”のような位置づけになっている。彼女は政治的扇動をしない代わりに、風俗の暗部、権力の影、仮面の下の人間性、民主主義の儀式性などを皮肉や冷笑混じりに描き続けている。

彼女の作品を多く扱っているスロベニアのGalerijahes Hest(ヘスト・ギャラリー)では、以下のように紹介している。「1957年にスロベニアで生まれ、1981年よりボリビア在住。スロベニアのリュブリャナ美術学校で学び、クロアチア・ザグレブのクルスト・ヘルドゥシッチ工房で修士号を取得。ボリビアでは陶芸と演劇のワークショップで研鑽

を積んだ。数多くの美術作品に加え、新聞・雑誌の挿絵を手がけ、ポスターやワインラベルのデザインも担当。サンタクルスの視覚芸術ワークショップではデッサンと絵画を指導している。」



写真3-6 若き日のEjti Štih

1982年以降、ボリビア国内外の主要会場で個展を開催。得意とするキャンバスにアクリル絵具を用いた技法で、ボリビア文化における社会状況をユーモアを交えて描き出す構図を創出する。題材は、閉鎖的なサークルに閉じこもった上流階級のスノッパな姿から、皮肉な笑みを浮かべサングラスで目を隠した腐敗した役人のユーモラスな描写まで多岐にわたる。彼女は最も深刻な題材でさえ、笑みを引き出す術を心得ている。彼女が用いる鮮やかな色彩は絵画やデザインの鮮烈さを増幅させるが、これは単に躍動感ある表現を追求するだけでなく、ボリビア・アマゾン盆地に位置する、彼女が生活し創作するカラフルな都市サンタクルスそのものから来ている」

なお、Ejti Štihは国内外で様々な賞を受賞しているが、2025年には「Premio Iberoamericano FCIII de Artes Plásticas」(Fundación Carlos III)を受賞していることを付け加えておく。

(つづく)

4. 日本人移住地訪問記(6)

—サンファン移住地への再訪—

風景写真家 松井 章

2024年12月、ボリビア東部の中心都市サンタクルス及びサンタクルス県にある日本人移住地サンファンを再び訪れました。前回は同年6月の乾季でしたが、今回は雨季のはじまりです。季節は夏にあたり、水田では田植えの時期を迎えていました。

前回は見る事ができなかった水田の風景を見たいと思っていました。また、この年の9月に日本で発行された「日本ボリビア友好切手」をお預かりしていたので、撮影にご協力いただいた皆様にお渡しすることも、今回の目的の一つでした。

◆サンタクルスで食べる日本食



日本から北米経由でサンパウロへ。さらに乗り継いで、サンタクルスに到着しました。この日の夜、前回6月にオキナワ移住地を案内してくれた黒岩幸一さんに再会しました。ご自身でプロデュースされている日本食レストランに一緒に行き、ラーメンやお寿司、餃子をいただきます。店内はお客様が大勢いて繁盛しているのがすぐに分かりました。日本食とはいえ、ボリビア人の味覚に合うようにアレンジすることに大変な努力をしているそうです。日本の食材もなかなか手に入らないので、食材を自分で加工する努力も怠らず、今では日本酒も自作して販売しています。早くも日本食が恋しくなっていたので、地球の裏

側で食べた日本食は旅の疲れを癒してくれました。

◆サンファン学園再訪



サンファンへ行き、最初に向かったのは、サンファン学園です。前号で述べたように、日本人としてのアイデンティティを残すために創設した学校であり、今では、移住地の人口の構成と同じく、生徒の多くがボリビア人となりましたが、教育の質が高いことで評判が良いそうです。子どもたちは授業中のように、昼間にもかかわらず校内は静かでした。本田由美先生と校長のDimelsa Jeannette e Morales Mamani先生に、切手をお渡ししました。

◆野田さんの鶏卵の保管庫



前回の訪問で大変お世話になった日比野正靱さんにご挨拶をしてから、鹿児島県ご出身の日系一世、野田利行さんのお宅を再訪し、ご自宅にある養鶏場の、出荷を控えた鶏卵を保管する倉庫を見せていただきました。養鶏はサンファン移住地の重要な産業の一つです。1960年代にはすでにその基礎づくりが始まり、1970年代以

降は農業経営の安定化や多角化、さらに機械化・大規模化の流れの中で大きく発展しました。その結果、養鶏は米や大豆と並ぶ主要産品となり、サンフアの卵は、ボリアにおける卵の普及と消費拡大に大きく貢献しました。一時期には、国内市場の相当部分を担ったともいわれています。

また、移住地では、割り当てられた土地ごとに土壌や気候条件が異なるため、農業に向かない土地を与えられた農家にとって、養鶏が経営を支える大きな助けとなることも多かったそうです。

整然とした倉庫の様子からは、遠い南米のこの地にも、日本人の実直な仕事ぶりが息づいていることを感じました。

◆田植えと稲刈りが同時進行する稲作

今回は、水田の田植えの様子を見たいと思っていました。しかし、訪れた12月中旬には、すでに田植えの時期は終盤に入っていました。

もともと、この地域では日本のように一斉に同じ時期に作業が進むわけではありません。サンフアは熱帯に位置し、農地ごとに土壌や水の状態も異なります。そのため、すでに田植えを終えた水田もあれば、まだ作業が続いている水田も見られました。

農家によって事情も大きく異なるそうです。同じような風景が広がっていても、分配された土地ごとに条件は違い、土の性質や肥沃さにも差があります。そうした違いが、農家ごとの格差につながった面もあると聞きました。土地が分配された当初、この一帯は一面のジャングルで、それぞれの土地が何に向いているのかは誰にも分かりませんでした。移住者たちは、それぞれの土地で試行錯誤を重ねながら、営農の道を切り開いてきたのです。また、わずかな距離の違いで降水量が異なることもあるそうです。その背景には、西に連なるアンデス山脈のアンボロ国立公園から流れ込む「雲の道」の存在が大きく関わっています。そして、その雲の道もまた、気候変動の影響で年々変化しているといわれています。自然に翻弄されることは、世界中の農家に共通する悩みなのだと思います。

◆植えたばかりの稲の苗



池田潤平さんの農場は、地平線まで続くかのような広大な土地にあります。それでも、移住地の中には、さらに大きな農地を持つ農家もあると聞き、驚きました。池田さんは、まずは田植えの準備が進む水田に連れて行ってくださいました。

最初に訪れた区画では、耕運機で田を耕している最中でした。乾季のあいだ乾いていた農地に水を引き入れ、泥状になった田を耕して、田植えしやすい状態に整えているのです。水深をできるだけ均一にすることで苗がそろって育ちやすくなり、雑草を抑える役割もあります。続いて、苗を育てているビニールハウスに案内していただきました。みずみずしい緑の苗がびっしりと育っており、近日中に田植えを待つ水田へ植えられる予定でした。

◆稲の収穫



また車で移動し、今度は稲刈りの最中の田んぼへ向かいました。そこでは黄金色に実った稲穂が垂れ、収穫の真っ最中でした。巨大なコンバインが稲を刈り取り、脱穀

した籾を並走する運搬車へ次々と流し込んでいきます。広大な田んぼで繰り広げられる豪快な収穫風景は、きっと多くの苦労が報われる瞬間なのだろうと思いました。日が暮れかけていましたが、作業は薄暗くなるまで続いていました。

◆豪快な脱穀



こうして、一つの農場の中で、水田を耕し、稲を植え、さらに収穫するところまでを、同じ時期に見ることができました。広い農地では、それぞれの田んぼの条件を見ながら順番に作付けを進めるため、作業の時期にも少しずつ違いが生まれます。稲の最初の作付けは10月頃だそうなので、このとき収穫されていたのは、早い時期に植えられた稲だったようです。

◆仁田原病院と仁田原憲一医師



朝、すぐ近くにある仁田原病院を訪ねました。日系一世の仁田原憲二さんは、ご両親に連れられて子どもの頃にこの地へ入植した方です。幼い頃から勉強が得意で、10代の頃にはすでに医師を志していたそうです。医師と

して経験を積み、現在はサンファン移住地で開業されています。その名声はボリビア全土に知られています。地域医療を支えるかけがえのない存在であり、病院は朝から多くの患者さんであふれていました。



◆CAISY(サンファン農牧総合協同組合)で見た鮭用の日本米

次に訪れたのは、CAISY(サンファン農牧総合協同組合)でした。多くの農家が所属する組織で、収穫された米はここに集められ、精米されたうえで出荷されます。施設では精米場の様子に加え、出荷を待つ米袋が幾重にも積み上げられている様子を見せていただきました。



精米後の米は、品質や用途に応じて、主に日本米を中心に約7つの等級に分けられ、販売店へ卸されているそうです。中でも高級米には「寿司専用」と記されたラベルもありました。こうした丁寧な仕分けを通して、サンファン移住地の米は、ひとつのブランドとして市場に送り出されているのです。

◆精米所



近年では、サイロの脇に積み上げられたもみ殻も有効活用されているそうです。もみ殻はバイオ炭に加工され、肥料として農地に施されることで、土壌に炭素が蓄えられます。そして、その炭素固定の価値を、アメリカの企業が炭素クレジットとして買い取っているといいます。施設から再び車を走らせ、今度は農業試験場へ向かいました。ここは、ブランド化された米の品種改良を担う、CAISY運営の試験場です。稲作を中心に、さまざまな農作物の品種改良や栽培効率の向上に向けた研究が進められています。広く平らに見える土地でも、実際には地域ごとの特性が栽培に大きく影響するため、この土地で研究を行うことに大きな意味があるのだそうです。

◆農業試験場のたわわに実った稲穂



すでに作付けされた田んぼでは、稲穂がたわわに実っていました。一方、田植えの最中の田んぼでは、日本のメーカー・ヤンマーの田植機が使われていました。整然と並ぶ田んぼや農業機械、そして稲を育てる人々の姿は、日

本の農村の風景とほとんど変わりません。

◆機械化された田植え風景



田畑の境界には背の高い熱帯雨林の樹木が残され、開拓の名残が今も色濃く感じられます。ときおり激しい雨が降り、地面からは熱帯特有の匂いが立ちのぼります。そうした瞬間に、ここがアマゾンの奥地であることをあらためて実感しました。

遠い異国の地へ渡り、農業を続けてきた日本人の暮らしは、この大陸が持つ多様な一面を物語っています。写真を撮りながら移住地を歩いていると、日本と南米という二つの場所が、静かにつながっているように感じられました。

最後に、町なかのラーメン屋で塩ラーメンを食べてから、CAICY(サンファン農牧総合協同組合)まで案内して下さった池田潤平さんに別れを告げ、オキナワ移住地へ向かいました。

(つづく)

写真家松井章の写真展お知らせ
「アルパカ ～アンデスの民と生きる～」

・会期:2026年4月17日(金)～23日(木)
・時間:平日10:30～19:00/土日11:00～17:00
(最終日14:00まで)

・会場:富士フォトギャラリー銀座
・入場無料・全日在廊

・作品解説:18日(土)・19日(日)・22日(水)
①11:30～12:00 ②14:30～15:00

<https://www.andina-travel.com/akira-matsui/alpaca/>

5. ボリビア開拓記外伝

コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を
生き抜いた人々 12

一般社団法人日本ボリビア協会
相談役 渡邊 英樹

ドンに無条件融資依頼(2)

「どうせやるなら、一番の人に当たろう」と、河合さんにお
願ひしてみるしかないとの結論に達したのだ。

しかし、とても公にできることではなかった。もちろ
ん、事業団の規定にも違反する常軌を逸したことで、
支部長が働くわけにはいかない。あくまでも渡邊個人
が秘密裏に勝手にやったこととして、押し通すことにした。

そして、私は面識のまったくなかったドン・ホセに会うべ
くラパスに向かった。海拔4000mのサンタクルスから
一気に4061mのエル・アルト空港に降り立つと空気の薄
さで酸欠状態になった。

これから始まる厳しい交渉の前に緊張していたのか
もしれない。それも「無利子、無担保、無期限」という
非常識極まるお願いだ。

最初に、こんな願いをしたら話も聞いてもらえず追い
払われるに決まっている。ドン・ホセに最初から会わせ
てもらったわけではなかった。



写真5-1 ラパス空港。後方は6439mのイリマニ山(1971年)

まず、パンチョ・リヴェーロとギレルモ・グッドモンソンの
両公認会計士、ホセ・ミランダ弁護士の3人に紹介され
た。いかにも厄介者が来たという表情だった。この3人
が、ドン・ホセが無謀な資産運用をしないようにと目を光
らせていた。融資を実現するにあたって、ドン・ホセとの
間に立ちはだかる厚い壁であった。

助かったのは、トヨタボリビア一社の支配人が日本人
であったことだ。その3人との会談の後で、木村翰由
支配人に会いコロニアオキナワの起死回生策を懸命に
説明した。長い間待たされた末にようやく、木村さんが
3人のブレンへの取りなしをしてくれて私とドン・ホセ
が1対1で会談する場を設けてくれたのだ。

ドン・ホセとの会談は長時間に及んだ。コロニア沖繩
の綿花事業は3千haの機械化耕地の造成が必要となる
ので、コマツのブルドーザーの代理店をしているドン・ホ
セにとっても、大きなビジネスチャンスになることを訴え
た。ドン・ホセは、人の心の奥底まで見通すような目で、
ずっと私を見つめていた。

話は聞いてくれたが、当然のことながら、すぐに結論
を出すことはしなかった。最初の会談を終えた後、ドン・
ホセは事業の信ぴょう性や可能性、そしてCAICOとい
う組織への信頼性を確認するため何度も私に疑問を
投げかけてきた。

その度に私はドン・ホセの元を訪ね説明を重ねた。
そして、ようやくCAICOへの融資を了解していただき
、最後に融資の条件について確認する段階に入った。
私は「無利子、無担保、無期限でお願いします」と伝え
た。ドン・ホセは、この時ばかりは目をむいた。そしてすぐ
にあきれ顔になり、この融資を承諾してくれた。私は

きょくど きんちようかん と はな こ
 極度の緊張感から解放たれ、へたり込んでしまいそう
 あんどかん み
 な安堵感に満ちあふれた。

こうしてCAICOの自己資金調達のめどが立った。早
 速、ドン・ホセにサンタクルスまでご足労をいただいた。
 みやぎとくしやう くみあいちやう こうちひろししはいじん あ
 宮城徳昌CAICO組合長、幸地広支配人に会って
 みな め まえ こじんこぎって まん
 ただき、皆さんの目の前でドン・ホセに個人小切手4万ド
 ンを切っていただいた。

み しゅつしきん
 見せかけではあったが、これをもって出資金ができ、C
 AICOは法人として正式に発足することになった。

CAICOが4万ドルをもって開設した口座に海外移住
 事業団からの13万8千ドルの融資が振り込まれた。

ようやく繰綿プラント発注の頭金が整ったのである
 。「不可能が可能になった」。「無から有が生じた」という
 情報はコロニアの中を一瀉千里に走った。

入植以来、耐えに耐えても希望の見えて来なかったコ
 ロニアに希望の明かりが見えたと皆が思った。我慢のタ
 ガが外れた。各農家は機械化耕地の造成へと一気に
 傾注していった。

繰綿工場が完成してから綿花の栽培をするのでは遅
 い。プラントの完成に合わせて、綿花の収穫がなくては
 ならない。金利が高いからである。当然、見切り発車で
 ある。事業団も、牧畜融資を止めて、各農家に対して
 機械化耕地造成資金、トラクター購入資金の貸し付け
 でこれを支援した。

コロニアオキナワの各農家も組合も事業団も、もう
 後戻りのできない、失敗の許されない絶体絶命の窮地
 へと自らを追い込んでしまった。



写真5-2 見切り発車で機械化耕地の造成が進む(1971年)

プラント輸入借金の保証が暗礁に

次は銀行保証の問題を解決しなければならなかった。
 繰綿プラントメーカーは輸出代金を米国の輸出入銀行
 から一括で受け取り、我々のところへ出荷する。繰綿
 プラントを輸入する私たちは、我々の延べ払い代金の
 返済を米国の輸出入銀行に対して保証してくれるボリ
 ビアに拠点のある銀行に支払う。いわゆる輸出入借
 金だ。

そこで、農業関係の金融を専門としているボリビア
 農業銀行に保証をしてもらうために、ラパス本店との
 交渉に入った。最終交渉に差し掛かった時、女神が
 出現した。サンタクルスでラパス行き飛行機に乗り
 込み、指定席に向かうと、隣の窓際席に気品のある美
 しい女性が座っていた。

ボリビアでは、まだ日本人を蔑視する女性がいたころだ
 ったので、恐る恐る話し掛けてみると、快く応じてくれ
 た。ラパスまでの間、むしろ彼女の方が会話が途切れ
 ることのないように気をつけて、日本人移住地のことな
 ども尋ねてくれて機内での会話は弾んだ。

ラパスの空港に着陸した時、彼女から、これからの

よてい き のうぎょうぎんこう ちよっこう
 予定を聞かれた。「農業銀行に直行して、エフライン・
 カポビアンコ総裁と面会する」と答えると、なんと彼女が「
 オー プリモ ミオ！」(私の従兄よ！)と叫んだのだ。
 のうぎょうぎんこう つ わら かお み
 農業銀行に着くと、あまり笑った顔を見たことがなかつた。
 そうさい わたし まね い
 総裁が、にこにこしながら私を招き入れてくれた。お
 かのじよ でんわ はなし
 そらく彼女が電話をしてくれたのだ。 おかげで話はス
 すす のうぎょうぎんこう ほしやう と つ
 ムーズに進み、ボリビア農業銀行の保証を取り付けるこ
 とができた。これで繰綿プラント購入に関わる案件の
 すべ お あんど はつちゆう
 全てが終わったと安堵した。 さっそく、プラントの発注
 おこな
 を行った。

ゆしゆつにゆうぎんこう
 ところが、しばらくしてアメリカの輸出入銀行が、この
 ゆしゆつにゆうしやっかん おう
 輸出入借款には、応ずることができないといってきた。
 ゆしゆつにゆうぎんこう しんようちようさきかん
 輸出入銀行が、アメリカの信用調査機関ダン・アンド・ブ
 ちようさ いらい けっか
 ラッドストリートに調査を依頼した結果として「ボリビア
 のうぎょうぎんこう ほしやう ゆしゆつにゆうしやっかん く
 農業銀行の保証では輸出入借款を組めない」との
 けつろん たつ
 結論に達したというのだ。

お おも
 まさかそんなことが起きるとは思いもしなかったので
 めんく たし がつ まえ べいこく
 面食らった。確か、その1月くらい前に米国で、ボリビア
 ちゆうおうぎんこう まん ていど ふわた だ
 中央銀行が13万ドル程度の不渡りを出したというニュー
 つた えいきやう
 スが伝えられていたので、それが影響して「ボリビアの
 ぎんこう しんよう すいそく
 銀行は信用できない」ということになったと推測された。
 じようほう ちくいち くりわた ゆにゆうだいいりてん
 こうした情報が逐一、繰綿プラントの輸入代理店をして
 にし めいよりようじ し
 いた西ドイツ名誉領事のハンス・ヒーレル氏からもたらさ
 れた。

あら あんしやう の あ し
 また新たな暗礁に乗り上げてしまった。ヒーレル氏も
 じぶん しょうばい えいごりよく ふじゆうぶん
 ちろん自分の商売ではあったが、英語力の不十分な
 わたし じぎやうだんじむしょ き め まえ べいこく
 私のために事業団事務所に来て、目の前で米国の
 ゆしゆつにゆうぎんこう こくさいでんわ じようほうしゆうしゆう きやうりよく
 輸出入銀行に国際電話をかけて情報収集に協力
 してくれた。



写真5-3 繰綿機械の輸入代理店をしていた西ドイツ名誉領事の
 ハンス・ヒーレル氏と筆者(1971年)

ほしやう だいじやうぶ と せんぼう
 「どこの保証なら大丈夫というのか」と問うと、先方は
 ぎんこう かわいし こじんほしやう しんようちようさ
 「ブラジル銀行かホセ河合氏の個人保証なら、信用調査
 きかん い
 機関のダンはオーケーと言っている」というのである。ボ
 ぎんこう しんよう こじん おどろ
 リビアの銀行より信用のある個人がいるという驚くべき
 げんじつ
 現実をつきつけられた。
 まよ ゆうよ じぎやうだん
 迷う猶予さえなかった。コロニアでは、すでに事業団と
 いちがん きかいかこうち ぞうせい ほしゆ む
 一丸となって機械化耕地の造成と播種に向けてのスタ
 き はつちゆう かくてい めんか
 ートが切られていた。すぐに、発注を確定しないと綿花
 しゆうかく ま あ ぎんこう そっけつ
 の収穫に間に合わない。銀行は、即決はしてくれない。
 いがい ひとり
 すがれるのは、またまたドン・ホセ以外には、一人もいな
 い。

ぼあい すべ すいほう き
 ダメな場合は、これまでのことが全て水泡に帰す。
 ふたた がよ はじ さき まん
 再び、ラパス通いを始めることとなった。先の4万ドルと
 ひとけたちが くりわた そうかくやく まん たいぎん
 は、一桁違う繰綿プラントの総額約40万ドルという大金の
 べいこくゆしゆつにゆうぎんこう ゆうし たい こじんほしやう ねが
 米国輸出入銀行の融資に対する個人保証のお願いで
 あん じよう ちゆうせいしん つよ じん
 ある。案の定、忠誠心の強いボリビア人のスタッフの
 はげ ていこう
 激しい抵抗にあった。

なに くりわた はつちゆう
 しかし、何がなんでも繰綿プラントの発注までは、こぎ

つ 着けなければならぬ。それ相当の誠意を示さずにて
ねが けるお願いでないことは十分に承知していたが、どこに
じゅうぶん しょうち
み あ かし じぶん なに
もそれに見合うだけの価値のあるものはない。自分に何
じぎょうだん ほっきゅう
ができるというのだ。事業団の薄給しかまい。しかし
さ だ いがい かくご き
、差し出せるものはそれ以外にはない。覚悟を決めて
つぎ もう で
次のように申し出てみた。

①ドン・ホセから個人保証をいだけいて繰綿プラントの
こじんほしょう くりわた
はっちゅう ただ ぎんこう こうしょう はい
発注をしたら、直ちにブラジル銀行との交渉に入り、
ほしょう さ か
保証の差し替えをする。

②万一、ブラジル銀行の保証と差し替えられなかった
まんいち ぎんこう ほしょう さ か
ばあい わたなべ じぎょうだん しょうがいちんぎん たんぼ
場合は、渡邊の事業団における生涯賃金を担保として
さ だ いがい かんが
ドン・ホセに差し出す。これ以外のことは考えられなかつ
ながく ちんもく つづ くち
た。ドン・ホセは、長く沈黙を続けた。そしてやっと口
ひら ほとけつく たましいい
を開いた。「仏作って魂入れずではしょうかぢない」
ほしょう しょうだく
保証を承諾してくれたのだ。

こうして、ようやくのことでタイムリミットぎりぎりて繰綿プ
くりわた
ラントを正式に発注できたのだった。(つづく)
せいしき ほっちゅう

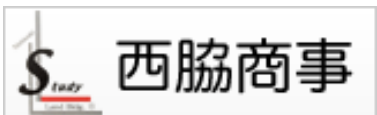
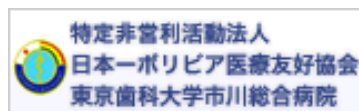


写真5-4 ホセ河合氏(右)と筆者

編集部

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ポリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2026

一般社団法人日本ポリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA
All rights Reserved